D 132　岩手県南地方に伝わる布細工について

麻生東北短大　　森田珪子

目的　余り布・裁ち落とし布などを接ぎ合わせて作る縦や敷きものを，岩手県南地方では，こんぶくろ・うつしき・きんだい・・・と呼んでいる。女性が自らの手で作り伝えてきたこれらのものを，祝事や佛事などの晴の行事や場で使用することは，欠かせない習慣であった。ところが近年になり，年々このことが薄れてきた。県内唯一の穀倉地帯であるこの地域で，この習慣が何故消えていこうとしているのか。農作業着をはじめとするこの地方の衣生活の現状と合わせ考えながら，農耕文化と布細工の関係を探りたい。

方法　私が住んでいる前沢町をはじめとする周辺12市町村で目にふれた布細工の作品を撮影・実測し，作者から直接手法を学び復元作業を行なった。平行して，それらが登場する地域の伝統行事―蘇民祭・水かけ祭・大り市講・・などに参加した。そこでの古老からの聞き取り・市町村史を中心とする文献調べ・日本の文様と稲作の発生地といわれる中国・雲南省に居住する少数民族の文様との比較も行なった。

結果　布細工の材質は一部の麻・絹・化繊を除いて，殆んどが木綿である。色彩は，赤，青を中心にして，これに白，黒，黄・紫などが組み合わされている。形は，紐状が基本である。布を一定巾の紐状に裁断し，そこから四角形，菱形，三角形の布を切りとり，それらを接ぎ合わせて平面化又は立体化していく。衣服のはじまりといわれている紐衣が彷彿としてくる。単純な布きれの形といい，接ぎ合わせる方法といい，手を使って物を作る生産という作業と共に，祈りの表現を見る思いがする。これらは，この地方に於ける機械化以前の稲作文化と密接にかかわっていたのである。